



TITLE:

# 價值形態と價值實體

AUTHOR(S):

吉村, 達次

---

CITATION:

吉村, 達次. 價值形態と價值實體. 經濟論叢 1953, 71(1): 63-78

ISSUE DATE:

1953-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/132281>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十一卷 第一號

---

明治前期の貿易政策	堀江保藏	( 1)
中共貿易の諸問題	谷口吉彦	( 21)
帝國主義の經濟學 (一)	靜田均	( 50)
價值形態と價值實體	吉村達次	( 63)
ドイツ獨占資本とベルリン六大銀行		
	大野英二	( 79)
甘土料の基本的性格	柏尾昌哉	(104)

---

[昭和二十八年一月]

京都大學經濟學會

# 價值形態と價值實體

吉 村 達 次

交換價值——價值形態の最も困難な問題は、價值實體が如何にして交換價值に現象するかという点にある。シユムペーター的<sup>註(一)</sup>にいうならば「如何にして評價過程が經濟的行爲に變化するか、特に前者が後者の原因として見られるか否か」にある。古典學派は労働を價值——交換價值の原因としたが、結果としての交換價值が原因としての労働から如何にして生ずるかについては、それを自然的なものとして承認する以上に何ら問うところがなかつた。彼等は産業資本の實踐的經驗を基礎として、正しい價值論を發展せしめたのであるが、その正しさの根據をただ經驗的事實にのみ求め、そこで確認されたものをそのまま自然的なものとしてうけ入れた限り、形而上學的という非難は、シユムペーターをまつまでもなく、脱れ難いものであつた。

マルクスがその價值形態の分析において問題にしようとしたのは、まさにこの点であり、交換價值そのものの發生的説明、同じことであるが、労働生産物は如何にして商品形態をとるかということを研究の課題としたのである。<sup>註(二)</sup>

以下まず古典學派——スミスが交換價值の説明に失敗した所以を、マルクスの指摘にもとづいて簡単に分析し、しかる後に資本論・第一卷・第一章・第三節・A・二・(a)「相對價值形態の内實」の分析を試みる。

註(一) シュムペーター「理論經濟學の本質と主要内容」(安井琢麿、木村健康譯) 六一頁

註(二) ローゼンベルグ「資本論註解」第一卷(直井譯) 一六四頁

## 一 スミスの交換價值論

マルクスは古典學派が交換價值の解明に失敗した所以を次のように述べている。<sup>註(一)</sup>

「古典派經濟學の根本欠陥の一つは、それが商品の・および商品價值の分析からして、價值をまさに交換價值たらしめるところの價值の形態を見つけ出すことに成功しなかつた、ということである。A・スミスやリカアートの如きその最もすぐれた代表者たちにおいても、古典派經濟學は、價值形態をば、まづたぐいでもよいもの、あるいは商品そのものの本性にとつては外的なもの・として取扱つてゐる。その理由は、古典派經濟學は價值の、大いさの分析に注意をすつかり奪われているということだけではない。それはもつと深いところに根ざしてゐる。勞働生産物の價值形態は、ブルジョア的な生産様式の最も抽象的な、しかしまた最も一般的な形態であつて、かの生産様式はこれにより、社會的生產の特殊な一種類として性格づけられ、従つてまた同時に、歴史的に性格づけられるのである。だから、もしひとがそれを社會的生產の永遠的な自然形態だと見誤るならば、ひとは必然的に、價值形態のかくして商品形態の、さらに進んでは貨幣形態・資本形態・等々の、獨自性を看過するのである。」

即ち、第一に價值を量的にのみ考察し、質的側面を問題としなかつたこと、第二には、これが第一の欠陥を必然的にもたつたのであるが、彼等がブルジョア的生產を従つて價值形態を自然的形態とみなし、價值形態の獨自性を看過した点をあげている。以下このような欠陥が彼等の交換價值論に如何なる混亂をもたつたか、を簡単にスミ

スについて考察しよう。

スミスが交換價值に觸れているのは、「國富論」第五章であるが、いま第四章までを交換價值論を展開するための前提と解し、彼の理論の進め方をみると、次のようになる。まず序論劈頭に勞働が國民の富の唯一の源泉であるという根本命題をかかげ、第一章ではこの勞働の生産力の増進をもたらず分業について、第二章では分業を發生させる原理として交換をあげ、交換は人間の性質における一の傾向にもとづくことを説明する。次いで第四章では、社會的分業の發達と共に成立する商業社會から貨幣の發生を合理主義的に導き出し、しかる後「種々なる貨物が貨幣または他の貨物と交換される法則、即ち貨物の相對價值或は交換價值——その物の所有がもつところの他の貨物を購買する力——を決定しうる法則」の研究に移り、まづ「この交換價值の眞の尺度は何であるか、換言すれば、すべての物品の眞の價格は何に存するか」という問題を提起し、「第五章 物品の實質價格と名目價格、即ちその勞働價格と貨幣價格」において、その究明を試みてゐる。以上のことから、彼の交換價值論の基礎には商品交換の行われる社會の構造が、社會的分業と私的生産 $\parallel$ 私的所有として事實上正しく認識されており、交換價值の實體として勞働一般を把握する前提が整えられてゐたことがわかる。それにも拘らず、私的所有は勞働の自然的歸結として考えられているために商品生産そのものが生産の自然的狀態としてあらわれ、従つて商品生産の反射にすぎない流通 $\parallel$ 交換も商品の貨幣形態も、合理的自然的なものとして先天的な人間本能から説明されざるを得ない。このような長所と欠陥はそのまま、彼の交換價值の説明を規定している。

さて、第五章でスミスは交換價值の眞の尺度を勞働に求めるのであるが、それを次のように説明する。人の貧富

は彼の享受しうる諸物品の多寡に依存するが、分業が發達すると各人はこれらの物品の大部分を「他人の労働」から獲なければならなくなるから、「彼の支配し得る労働の量、言葉をかえていえば、彼が買うことの出来る労働の量によつて」彼の貧富が決定されるようになる。そこで、ある「物品の價值」はそれを以つて他の物品を交換せんことを欲する人にとつては、その物品によつて購入または支配しうる労働の量に等しい、「それ故に、労働はあらゆる物品の交換價值の眞の尺度である」と。

こゝに既にスミスの價值論について、通常指摘される投下労働説と支配労働説の混同の萌芽がみられるのであるが、同時にまたかゝる混同を生みだした原因もこれを見出すことが出来る。こゝではまだその原因を價值形成的労働と労働力の價值との混同とするわけにはゆかない。交換價值の尺度とされている労働は、後に原始社會について「種々の物品を得るために、必要とせられる労働量の間の割合は、これらの物品を相互に交換するための定規となりうる唯一の事情であつた」<sup>(註二)</sup>といつてゐるように、またその他の箇所から推しても、實際は投下労働を意味しているものとしなければならない。そこで、もし投下労働だとするならば、「支配しうる他人の」という規定はどのように考えればよいかということが問題となる。マルクスは、スミスが労働を考察する場合には、總体としての社會的分業を基礎においていたので、支配しうる他人の労働の量ということとを、事實上「私の労働」と「他人の労働」の等置、即ち社會的労働の量と考えていたのであつて、對象化された労働と生ける労働の混同と解すべきでないとしている。<sup>(註三)</sup>けれどももこういふ結論を出すまえに今一つの点を解決しなければならぬ。スミスはさらに進んで「……彼の財産は……他人の労働の量に、更に同じことではあるが、それを以つて購ひ得、または支配しうるその他の他人の生産物の量に正確に比例して、或は大であり、或は小である。」といつてゐるように、「他人の労働の量」即

「他人の生産物の量」とし、交換価値が支配しうる他人のものについて「労働」と「物品」とを同一視している。このことからみて、こゝでミスは或る商品の他商品に對する交換比率という本來の交換価値の観点から問題を眺めているのであつて、そこから「支配しうる他人の」という言葉が附加されていると見てよいであらう。さらにまた交換価値は「普通」には物品の量ではかられるが、それを本質的に規定するものは兩者に投下された労働の量なのであるから、支配しうる他人の生産物は事實上他人の労働の量にはかならないのであり、従つて交換価値を他人の労働の量に對する支配といふかえても同じことであると考へたのではなからうか。そうだとすればミスは交換価値本來の表現の中へ、労働による價值規定をもちこみ、交換価値の形態のまゝで價值規定をも一諸に説明しようとしたわけである。

そこで次に問題になるのは、交換価値の物品による表現と、直接労働による表現との間に、ミスは何らかの質的差異を認めていたかどうかということである。彼は市場において行われる異質労働の同質労働への還元を問題としているが、その還元が客観的な商品生産様式に規定されてあたかも自然法則の如く貫徹されるとは考へないで、結局市場で商人達の折衝斟酌という主觀的操作にゆだねてをり、従つて價值の度量としての労働を抽象概念とする場合にも、その意味するところは實際の市場では平明で觸知しうる物品による表現に比較して、わかり易く正確な尺度とはなり得ないという意味であつて、やはり量的な尺度としての側面からのみとりあげているにすぎない。かゝる還元が同時に具體的労働の捨象的労働への、私的労働の社會的労働への、質的に獨自な労働への還元を含むことは彼の理解するところではなかつた。けれどもそれ自身の價值が變動する諸物もまた正確な尺度たりえないことに気づいてゐた。そこで不變の價值尺度が追求され、「いつ如何なところにおいても（平均的）労働者にとつては相

等しき價值を有する労働の量」が結局「それ自身の價值において不變」であり、「究極のそして眞實の標準」ということになるのである。〔こゝで始めてミスは労働をして不變の價值を形成せしめる特殊な質を問題とせざるを得ない。しかし労働を自然的なものと解するミスにとつては、そのような質は労働そのものに潜むものではあり得ない。それは外からしかも人間の性質からあたえられねばならない。かくて労働を「勞役と苦心 (toil and trouble)」または「安樂と自由と幸福の犠牲」として主觀的に評價する必然性が生れるのである。彼にとつては人間的なるものは「安樂と自由と幸福」であり、労働はその犠牲として「勞役と苦心」であり、家畜の勞役と異なるところのない非人間的なものとしてあらはれる。それ故に價值としての労働は質的にも量的にも、社會的生產過程においてはなく、労働者の心の中で既に絶對的に規定されているが故に、それはそれ自体として自明なものであり、究極の標準たるにふさわしいものになるのである。しかも他方において労働そのものは家畜の労働と同じく單なる肉体的現象として理解されているのであるから、その労働の生産物の交換關係の内部で労働があらためて自己を人間的労働という特殊の質として表示する必要はないわけである。かくてすべての商品は労働の生産物であるというだけで、直ちに一定量の價值をもつ商品であるから、あとは交換される諸商品價值の相對量があきらかになればよい。この交換價值を物で表現するか、労働で直接表現するかは、單に量的正確度の差異にもとづく便宜的なものにすぎない。こゝに投下労働説と支配労働説がミスにおいて併存し得た眞の理由がある。

けれどもこのような交換價值の二重の表現は労働の質に關するミスの間違つた規定を除いてみれば、諸商品の價值關係を通じて、私的労働が社會的労働に還元されることを事實上表現しえていたともみられ、無意識的ながらミスをして價值の大きさを規定する労働を社會的労働としての質において把握せしめる槓杆となつたのである。



註(1) K. Marx, Das Kapital B. I. S. 87 (長谷部譯 第一分冊 二七一頁)  
註(2) K. Marx, Theorien über den Mehrwert B. I. SS. 134—135 (改造社版 向坂譯 一三七頁)

## 二 價值形態論の課題

マルクスは資本論第一卷第一章第一節及び第二節において商品を分析し、それが使用價值及び價值として、或は具體的勞働の生産物及び抽象的勞働の膠結物として、本來二重的なものであることを示し、それらの契機を個々に分析したのち、第三節においてこれらの二重物が現象する形態、即ち價值形態を分析している。ところがこの場合にも出發点は商品A—商品Bという交換關係であり、第一節の場合と異るところはない。けれども分析の角度は全く異っている。

第一節の場合、二商品の關係自身が自ら語るところのものを<sup>註(1)</sup>つぎつぎと思惟の中に正しく反映して行つたにすぎないのであつて、第一節における敘述がこのことを示してゐる。商品A—商品Bという方程式は何を意味する(Besagen)か。A・Bという二つの異なる物のうちに、同じ大いさの成る共通者が實存することを意味する。だからこの諸商品の交換關係を顯然と(aneinanderlich)性格づけるものは、まさにそれらの諸使用價值の捨象であり、かくて微塵の使用價值をも含まない。諸商品の使用價值を度外視すれば、残るものは勞働生産物という屬性だけであり、しかも勞働の具體性は使用價值の捨象と同時に捨象されねばならないから、結局捨象的人間的勞働の結晶物だ

けである。かゝるものとして、それは價值である。このように分析が進められるのであるが、さて二商品の關係自身が *besagen* するとはどういうことであらうか。マルクスは資本論<sup>社</sup>初版で次のようにいつてゐる。

「人々は、彼等の諸生産物を商品として互に關係せしめるためには、彼等の種々な労働を捨象的な人間の労働として等置せざるを得ない。彼等はこのことを意識してゐない、しかし彼等は、物質的な物を價值という捨象物に還元することによつて、このことを行う。それは彼等の物質的生產の特殊的な様式とこの生産が彼等を押し入れる諸關係とから必然的に生れでるところの、自然發生的な・従つて無意識的本能的な・彼等の腦髓の作用である。第一に彼等の關係は實踐的に存在する。しかし第二に、彼等は人間であるから、彼等の關係は彼等にとつての關係として存在する。そして彼等の關係が彼等にとつて存在する様式あるいは彼等の腦髓のうちに反映する様式は、この關係の性質そのものから發生する。」

即ち商品の交換關係は人と人との關係であるから、まず彼等自身の活動、行爲として實踐的に存在する。けれども人と人との關係は商品交換においては物と物との關係におおいかくされて直接あらわれない。自己の實踐的活動が物自体の活動として自己に對立してあらわれる。従つて彼等が實踐的に無意識的に行つてゐる同一労働への還元が物と物との價值物への還元として、實踐的にその物と對立してゐる人間の頭腦に自然に反映してくる。このことは商品生産社會における人と人との關係の特殊な性質、即ち抽象的労働が社會的労働としての意義をもち、それ故に物において自己を表現しなければならないという「關係の性質」から必然的に結果するにすぎぬ。かくて數百萬回となく行われる商品交換の經驗を通して、商品生産者達の頭腦の中で、商品に潛んでいた二つのモメント、使用價值、及び價值が自ら區別されるのである。

このような區別がますます明白になるためには、歴史的には物々交換から商品交換への發展がなければならぬのであるが、それは同時に生産過程が商品生産過程としての性格をもつことであり、生産者は最初から意識的に商品生産を目的として生産を行うようになり、生産過程は一面では他人のための使用価値の生産として、他面では価値の生産として二重にあらわれ、従つて労働もまた自ら二重にわかれて商品生産者達の頭脳に本能的に反映せざるを得ないであろう。こうして商品生産者の頭脳に實踐を通して自然にあらわれるものを、思惟の上に意識的に正しく反映したものが第一節における分析の過程にはかならない。この分析が眞に正しいものであるかどうかは、今までのところ商品生産者達の經驗的事實に裏づけられてゐるだけであつて、それだけでは分析の結果獲られた諸範疇の妥當性が證明されたことにはならない。こゝではなほ諸範疇は思惟の產物として、捨象的に把握されてゐるにすぎず、次には諸範疇が運動・連關・發生の過程においてとらえられねばならない。即ち労働の二要因の自己運動かも價值及び交換価値の發生を跡づけることが必要である。

かくて今や方程式をして自ら語るにまかせておくわけにはいかなないのであつて、何故に自ら語るにいたるかが、従つて方程式の内部に入つてその構造を運動の過程においてとらえることが追求されねばならない。だからマルクスは「相對價值形態の内實」を分析する目的を規定して、「一商品の簡單な價值表現が二つの商品の價值關係のうちに如何に潜んでゐるかを發見する」にあるとしてゐるのである。

註(一) Das Kapital B. I. S. 41 (長谷部譯 第一分冊 一七六頁)

註(二) Das Kapital B. I. 1. Aufl. SS 72—73 青木書店刊 (宮川譯 資本論初版第一章及び價值形態 七三—四頁)

註(三) Das Kapital B. I. S. 54 (長谷部譯 二〇二頁)

### 三 價值形態の分析(一)

價值形態分析の出発点としては商品A—商品Bの方程式は「同じ本性をもつもの」としての價值をなお自己のうちに閉ぢ込めてゐる (einschließen) <sup>註二</sup> 閉ぢこめられた價值は自己の存在を如何にして外部にあらわすのであろうか。

A・B兩商品の價值關係そのものを通じて以外にはない。

商品A—商品Bにおいて、AはBに等しいものとして關係してゐるのであるが、このような關係が成立するのはAもBも「同一實體のもの」即ち價值として等價の關係に立つてゐるからである。AもAとしてではなく價值としてBに關係し、逆にBもまたそうであるからこの兩者の關係は價值關係である。この關係を通じて價值は如何にして自らを表現するか、そのプロセスをマルクスは次のように定式化してゐる。

「上衣に對する價值關係によつて、リンネルは一舉兩得をする

(一) リンネルは、他の商品を自らに對して價值

として等置することにより、價值としての自分自身に關係する。それは、價值としての自分自身に關係することにより、同時に自らを價值としての自分自身から區別する。

(二) それは、その價值の大きさを——こゝに價值の大

きさとは價值一般と量的に規定された價值との兩者であるが——上衣で表現することにより、その價值存在にその

「リンネルの」直接的な實在から區別された價值形態を與える。それは自らを、かく自分のうちで分化せるものと

して表示することにより、自らを始めて現實的に、商品として同時に價值であるところの有用物として——表示する」<sup>註三</sup>。

このようなプロセスの形式そのものは別に商品に獨白のものではない。それはマルクス自身この過程をより解り

易く説明するために自然科学的事例を多く引用してゐることからも明らかであらう。商品における獨自性はまず第一には、この過程によつて商品Aの價值性格——即ち價值の實體は抽象的人間勞働であるということ——が歩み出てくるということである。その論理的手續は上の引用文の(一)に示めされてゐるものであり、第二版では「他商品に對する一商品の價值關係においては、……その一商品の價值性格が、他の商品に對するその商品自身の關連によつて歩み出てくる」。と述べ、次いで、種類を異にする諸商品の等價表現は、商品Aをつくる勞働が商品Bをつくる勞働に自らを等置せしめるという廻り道をして、兩勞働を事實上人間の勞働一般に還元し、それによつて價值を生成する勞働の獨自な性格を現出させる事情を説明してゐる。

けれどもこのプロセスが價值性格を現出させるということだけならば、そこには何ら神秘的なところはない。獲られた結果だけを見れば一見第一節における分析の結果と異なるところはないようにさえ見える。またこの側面だけならば、マルクスがフランクリンの例を引用してゐることによつても、また先にミスが交換價值を他人の勞働の量に對する支配として表現したことからみても、すでに無意識的ながら價值性格の發見のためにこのプロセスがたどられてゐたということが出来る。

けれども第一節での分析は、商品生産者の産業的實踐がおのづから區別するところのものを正しく思惟にうけてめて行つたにすぎなかつたのであるが、こゝではそのように自ら區別する過程そのものの内側が分析されてゐるのであるから、そのことが結果に對してやはり大きな違いを與えてゐる。即ちこゝで自らの存在を使用價值と區別して示す價值は、もはや單なる價值抽象ではありえない。商品Bとの反省關係を媒介として、商品Aの内部に照明があたえられ、Aのうちに潜んでゐた價值がA自身の中で使用價值と區別されて自覺されるようになったのであるか

ら、使用價值と價值の對立は抽象的なそれではなく、商品Aのモメントとして、對立物の統一として存在してゐる。同時にそれは一つの積極的な意味さえもつてくる。何となれば、このような過程を経て、勞働の抽象的一般的性格が表示されるということは、とりもなおさず商品に對象化されてゐるのは私的諸個人の特殊的勞働であり、それが一般的勞働に還元されるには流通過程——商品の交換關係を通じねばならないということをしめしてゐると同時に、商品Aの一モメントとして自覺された價值の實體は、私的勞働から還元された、一般的社會的勞働であるということ、流通においては勞働は一般的社會的勞働としてのみ價值實體たる意義をもつということをしめしてゐる。更に諸商品がかかる價值存在としてのみ自己を實現しうるのであるならば、自らの生産過程にこのような社會的單位の對象化された商品を生産すべく強要せざるを得ない。その結果第一に質的には、直接生産過程において勞働の二者斗争的性格が鋭くされ、第二に、量的には勞働生産性の向上を通ずる社會的必要勞働への平準化が進行する。第一節においてはこれらの諸モメントは過程に媒介されるものとしてではなく、個々別々に抽象的に分析されたにすぎなかつたが、こゝでは商品の流通過程が生産過程に自己の商品形態に適應すべきことを強要することから、必然的に生ずるものとしてしめされるのである。即ち生産と流通の交互作用そのものが、流通が原因として生産に作用する側面からつかまれてゐるのである。

しかしながらこの側面だけを一面的に固執すると、それは「不充分さ」に轉化する。流通の生産への反作用、生産過程の商品生産への適應という点のみから生産流通の關係を見る場合には、例えばスミスのように交換を分業の原因と見る誤つた見解さえ生れてくる。しかもそのために流通を生産の結果と見る路がふさがれ、流通そのものの發生を形而上學的に説明せざるを得ないこととなり、生産そのものは流通に受動的に適應する物質的生産力の活動

としてのみ考えられ、商品生産關係は流通の領域に全くおしこめられてしまふのである。だから労働が價值を規定するといつても、兩者の内在的な質的な關係は無視され、單に外面的な量的な依存關係としてしか把握されないのである。

このように諸商品の交換關係は使用價值と價值の對立物の統一としての商品の内的構造を展開すると共に、生産を商品形態に適應させ、生産過程の内部で労働の二者斗争性を發展させるのであるが、ひとたびしかるものとして商品生産過程が成立すると、今度は逆に生産過程自身が自己に適應するように流通過程に強制し、流通は生産過程の反射にすぎなくなる。商品生産關係は即自的には既に生産の内部で生み出され、流通過程では單に實現するにすぎないものとなり、生産こそ流通の眞の原因となる。このような生産と流通の統一的把握によつて始めてスミスに見られ、また他の多くの經濟學者に見られるような流通主義的一面性は克服されるのである。

註(一) Das Kapital B. I. S. 55 (長谷部譯 第一分冊 二〇三頁)

註(二) Das Kapital B. I. Aufl. S. 30 (宮川譯 三六頁)

註(三) Das Kapital B. I. SS 55—56 (長谷部譯 第一分冊 二〇五—六頁)

註(四) op. cit. S. 50 (同上 二〇六頁)

#### 四 價值形態の分析(二)

次にマルクスは價值性格の現出だけでは不充分なることを指摘しつゝ次のように言つてゐる。

「だが、亞麻布の價值を構成する労働の獨自な性格を表現するだけでは充分でない。流動狀態にある人間的労働

力、すなはち人間的勞働は、價值を形成するが、しかし價值ではない。それは凝固せる狀態において、對象的な形態において、價值となる。亞麻布の價值を人間的勞働の凝結として表現するためには、それは亞麻布そのものとは物的に異り、亞麻布と他の商品とに共通な、一の『對象性』として表現されねばならぬ。この課題はすでに解決されてゐる<sup>註(一)</sup>。

これから明らかなように、先にマルクスが價值表現のプロセスを定式化した文章の第二段はこの解決の様式を示したものにほかならない。第一段と異なる点は、商品Bの自然的形態が、商品Aの價值を感覺的な形象において表現するための材料として役立つことによつて、商品Aの價值が自己の自然的形態とは異なる價值形態を得て、「對象性」として表現され、商品は使用價值及び交換價值という二重の形態であらわれ、現實に商品となるということであるが、形式そのものとしてはこのプロセスは實質上は既に第一段のうちにふくまれ、その反面をなすにすぎない。こゝで大切なのは、このように價值が他商品の自然的形態で自己を表示しなければならぬ必然性はどこにあるかということである。マルクスの所謂「價值形態の理解を妨げる全困難の樞軸」<sup>註(二)</sup>はこの点に横わる。この必然性は既にマルクスによつて示めされているように、價值を形成する勞働の一般的捨象的人間勞働としての獨自性格から来る。だから勞働の二者斗争性こそ實は價值形態の神秘を解決する鍵であり、それが「經濟學を理解するための樞軸」たる所以もこゝにおいてその實を示すのである。

勞働の二者斗争性は質的には次の点にあらはれる。價值關係にある商品A及びBをつくる勞働にふくまれてゐる捨象的勞働は、唯A・Bをつくる勞働としての具体性を捨象されてゐるという限りで捨象的であるから、當然その



妥當範圍は、商品として相互に交換關係に入り込むところの相異なる使用價值をもつ商品の數によつて限定されるが、その範圍内では一般的普遍的人間の労働としての資格をもつ。従つて資本制社會においてそれは概念に一致した範疇として確立するのである。だから捨象的労働はそれが具體的でないという限りで捨象的労働であり、具體的労働は逆に捨象的でなく相互に相異なる質をもつ限りで具體的労働であるにすぎないのであるから、相互に個有的他者をもち、他者なしには無意味なものであり、このような對立物の統一としては同一の労働のモメントにすぎない。こゝからまた、價值を形成する労働たるためには、第一に自己の具體性から區別された質でなくてはならないが現實にはその具體性と混和されてゐるのであるから、自己と異なる具體性において表示するものでなければ自らの捨象的な質を示すことが出来ないといふことがでゝくる。

さて人間の労働力は、その對象たる特定の質料に對立して、一定の具體的形態で支出される場合にのみ、質料と合一し使用價值を生産するのであるから、それ自体無規定な捨象的人間労働が對象化されるのは、具體的労働の支出に依存する。ところが商品Aを捨象的労働の捨象化、即ち價值として確保するためには、その物を使用價值たらしめる一切の具體性を捨象しなければならぬ。だから捨象的労働の對象化としての物は、それ自体としては必然的に、頭腦の中にのみ存在する捨象的な思惟物にすぎない。「麻の織物は頭腦の織物となる」<sup>註三</sup>。このような透명한思惟物が現實に自己の存在を表示するためには、従つて當然「外界の物材」を必要とする。けれども商品A自身の自然形態ではこのことは不可能であり、他の商品のそれで行くはならぬ。そのためにはA・B兩商品が價值關係に立つてゐることが必要であるが、しかし一度この關係が實踐的に成立するならば、商品Aに對象化された労働は必然的に自己を具體的形態から區別すると同時に、商品Aと異なる唯一の「物材」たる商品Bの自然的形態において

表示される必然性にあるのである。換言すればこゝでは生産が自己の形態を流通におしつける。けれども流通の媒介をえて始めて自己を實現するのであつて、流通の相對的獨自性は忘れられてならない。

このようにして労働の二重性は、價值形態の困難を解決する道を拓いたのである。

商品Aと商品Bにおいては、商品Bはその自然の形態で價值としての意義をもつのであるから、この等價形態に始めて物神崇拜があらはれる。労働の二重性はこの神秘のヴェールの奥を暴露した。けれども労働が價值及び交換價值という物的表現をとるのは、どのような條件の下であらうか。いう迄もなく社會的分業と私的生産（『所有』）を基礎とする商品生産社會の下においてである。價值形態論では、このような條件は前提され、その上で労働が價值及び交換價值に現象するプロセスの内側のみが追求された。物神崇拜論ではこの條件が改めて採り上げられ、先のプロセスがさらに深く立入つて追求され、價值を形成する労働の獨自な社會的性格がさらに明確となり、労働生産物が商品形態をとる必然性、或は人と人との關係が物と物との關係としてあらはねばならない所以が全面的に暴露されると同時に、物神崇拜の必然性も證明される。かくて労働と價值の因果的連關の全容が完全に展開されるのである。

註(一) Das Kapital B. I. S. 56 (長谷部譯 第一分冊 二〇六—七頁)

註(二) Das Kapital B. I. Aufl. S. 36 (宮川譯 四二頁)

註(三) op. cit. S. 38—34 (宮川譯 三七—三九頁)

附記 この一文を書くにあつて、特に梯明秀教授の著書「資本論の學問的構造」から多くの示唆を賜つたことを深く感謝しなければならぬ。一々の箇所についてそのことを指摘すべきであるが、省略した。